

# 詠 詞 集

三月号



花鳥諷詠

3月号 (444号)

日本伝統俳句協会

# 花鳥諷詠®

令和7年3月 ■ 第444号 ————— 目次

## 第三十六回日本伝統俳句協会賞 ..... 2

協会賞	「花下残影」	抜井 諒一
新人賞	該当なし	
協会賞佳作	第一席 「こちらまで」	渡辺 檀
	第二席 「会陽」	勝村 博
	第三席 「天草の旅」	田中 黎子
	第四席 「神無月」	渡辺 光子
	第五席 「五階席二列九番」	武井 禎子

## 花鳥諷詠選集 ..... 山田 佳乃 ..... 9

三村 純也 .....11

一頁の鑑賞 ..... 大橋 一弘 .....14

池末 朱実 .....15

この人の作品 ..... 星野 愛 .....16

卯浪 .....17

佐藤郁良氏に聞く (1) ..... 阪西 敦子 .....18

虚子研究 『六百五十句』研究 (61) .....23

風報 .....25

公告 令和七年度事業計画と予算書 .....27

地区行事開催日程表 .....26

編集後記 .....32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしぬ』より「つり」中村不折画

# 花鳥諷詠選集

## 山田佳乃選

### 特選五句

行間に割り込む真夜の寒さかな

福岡山口裕子

着水の白鳥夕日抱きけり

浜田田中静龍

時雨雲ひかりに押されつつ消ゆる

高松福家敬子

一筋に踏み砕かれし落葉径

横浜秋吉 齐

冬耕のつちくれ午後の日にはぐれ

八代山下しげ人

### 二句短評

一句目——本を読みふけていると時間が過ぎるのも忘れてしまう。いつしか作中の話の情景と現実の寒さが重なり合ってきたのだろう。虚実が混じり合ってゆく面白さがある。

二句目——大きな羽を広げて着水をする白鳥の姿はドラマティックで迫力がある。減速していく羽搏きの翼がまるで夕日を抱くように見えたのだ。美しい夕暮れの景。

### 入選六十句

橋桁の際まで伸びる海苔の簀阿南 かつせ千津

短日の青空青きまま昏るる八王子 小町谷滋子

短日や螺子を捲かれてゐるやうな大川 今泉 美代

煤けたる梁の山宿牡丹鍋福山 小林 翠子

鉢の菊一花一魂屹立す糸島 小河美紗子

初しぐれ萩の湯呑の罅ゆたか福岡 棚瀬 弥生

中庭に日のまはりきて花八つ手東京 勝又 洋子

どことなく青空の揺れ初時雨太宰府 持永真理子

春著縫ふ京三条のみすや針東京 吉里ひとみ

蟻の道筥の先に崩れけり香川 福家 市子

支笏湖の忘れさられし冬紅葉苫小牧 杉山 桂子

鳴の水尾朝日を白く引きてをり高松 渡部 全子

冬鳥となり庭園の声となる半田 稲葉 京閑

枯れてなほ蔦の執着深まれり成田 小川 笙力

迷ひ無き庭師の缺息白し箕面 田村 文代

釣舟の数十隻もゐる小春 天津 伊藤 薫  
 残菊の頭もたげる日の力 天童 村形 嵩子  
 闇汁や相撲甚句に始まりぬ 高知 河野 紅柳  
 敬老日百寿歌へば皆うたふ 糸島 藤原 泰子  
 日向ほこきのふのことの覚束無 江津 安田 心道  
 枯野行く豪華列車のシャンデリア 小千谷 大矢あきこ  
 今日音踏みしめてゐる落葉道 鳥取 井上登志枝  
 雲の間に一縷のひかり神還 鹿児島 串間 麻衣  
 水軽き手押ポンプや畑小春 鹿児島 萩尾 葉月  
 宮跡の土俵に積る落葉かな 鹿児島 角屋敷昭子  
 鳩生まれもつたる俳諧味 糸島 宮脇 睦子  
 澄む水の底に日向のありにけり 島原 園田 正栄  
 どつと来てどつと人去る冬紅葉 香川 柴田 禮美  
 生かされて吾の影濃かり日向ほこ 江津 大前とも子  
 飛ぶ鴨も漂ふ鴨も日矢の中 加賀 折橋紀与美

またひとつ松ぼくり蹴る秋思かな 大阪 山内 繭彦  
 花石路や旧家に遺る駒繫ぎ 西宮 宮本 露子  
 おほかたは御健吟をと賀状書く 吹田 小井川和子  
 熱爛や一日の悔いを飲み干しぬ 高松 郡 としゑ  
 日向ほこ名は知らずとも友となり 金沢 中田 康子  
 山眠る余白の広き時刻表 西東京 今井 名津  
 散紅葉大樹は大樹なりし嵩 京都 山崎 貴子  
 離子方親子でつとめ里神楽 高知 伊野部哲也  
 給食の八等分に切る林檎 高松 塩田八寿子  
 登るほど落葉の路の明るさよ 芦屋 山岸 正子  
 まだ続く戦のニュース聞く寒さ うきは 中川 寿朗  
 泰然と大寒に入る天守閣 荒尾 大川内みのる  
 鷹匠の女鷹より鋭き眼 郡山 濱名 伸子  
 日溜りは終の安らぎ冬の蝶 神戸 光山 恵子  
 初雪を踏みて故郷の音の中 小諸 丸山 ま美

冬麗や水より明くる川の町 香川 三宅久美子

極楽へゆく貌ばかり日向ほこ 春日 志鶴 富生

一瞬の風に修羅なす落葉径 横浜 永澤 功

柿もぎのよるめく竿の一騎打ち 福岡 森田寿美子

焼諸や生活の楽にならざりし 芦屋 勝田 展子

短日や午前と午後の参観日 山口 辻岡 伸子

凍星や城門今も堅固なり 大牟田 藤好 信子

病院の廊下寒さの出入りする 高松 藤田 敦雄

百過ぎて一句を求め去年今年 福山 横岡 義道

白だけが目立ちて木の葉髪散れる 川崎 飯川 三無

冬ぬくし話し相手のゐるだけで 鳥原 池田みを子

くりかへし母呼ぶ父の日向ほこ 鹿児島 塚脇 涼子

また一つ閉ぢし古書店銀杏散る 鹿児島 坂本 啓子

冬日和音楽室の鍵の音 川崎 高原 沙織

遠山の頂白く冬そこに 金沢 米田 玲子

### ●三村純也選

#### 特選五句

長生きは楽しきものよおでん酒 高知 沢田 佳代

三十三才風より軽く飛び来たる 立川 日置 正樹

待ち合はす師走の風の八重洲口 福島 遠藤 里乃

玄海を韋駄天走り鱈起し 神戸 田中 あかね

己が枯れ知らぬ貌して枯蠅螂 下関 今田 真澄

二句短評

一句目——「長生きは得でっせ」というのは阿波野青  
畝先生の名言。この句は「長生きは楽しいもんでっせ」  
という。元氣におでん酒を酌んで、いよいよ意氣軒昂  
なお年寄である。あやかりたくなるような一句。

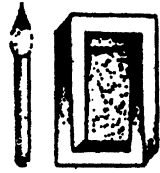
二句目——三十三才は雀よりもまだ小さくて可愛らし  
く、地鳴きの声も高い。六甲でも標高の高いところで  
見たことがあるが、まさに風よりも軽いような感じで、  
藪から飛び出して来た。この中七がその姿を活写して  
いる。

入選六十句

白菜のあればどうにかなる夕餉	鳥原 三好 立夏
新聞の見出し拾ひて日短	大牟田 森永 清子
毛玉取り好きなセーター復活す	高山 大下 雅子
掘り上げて懇ろに置く蓮根かな	徳島 先山 咲
袴著の裾よりのぞくスニーカー	金沢 金谷 優子
煤けたる梁の山宿牡丹鍋	福山 小林 翠子
出港の船を追ひゆく冬鷗	福岡 馬場 紀子
中庭に日のまはりきて花八つ手	東京 勝又 洋子
少しづつ膝に形や毛糸編む	高知 岡林知世子
冬銀河仰ぎ地球の端に住む	小樽 伊藤 玉枝
銀座にも降る落葉ありバスを待つ	東京 清水千鶴子
敬老日百寿歌へば皆うたふ	糸島 藤原 泰子
その中の猫も一員日向ぼこ	大村 福田 洋子
手袋にしまふ君との握手の手	伊万里 萩原 豊彦
なぐさめの言葉めきたる帰り花	福岡 黒田 純子
仕合せのお負けを一つ焼諸屋	神戸 明石 裕子
落葉踏むより風の音山の音	鳥取 椋 則子
人頼み出来ぬもの抱き日短	大宰府 柴田慧美子
黒塗りの車列に銀杏落葉かな	東京 大原 栄子
忌に参ず一歩一歩の露けしや	東京 庄嶋 里子
毛糸玉一人の時間いとほしむ	市原 飯塚 咲子
セーターの赤着て家居楽しくす	高松 池田 裕子
校正のまなこ上ぐれば日短	山形 布川 國雄
栗拾ひ声の小躍りしてをりぬ	朝倉 鶴田 ゆき
落葉積む昨日の色に今日の色	浜田 小池ミサエ
青空に紛れまぎれず帰り花	鹿児島 永井 紀子
数へ日や退院の目処心待ち	金沢 岸本佐紀子
夙先に鴨来て遠き伊吹山	高島 貫野 浩
仏間まで日が差してくる十二月	みやま 海谷 育男
生かされて吾の影濃かり日向ぼこ	江津 大前とも子

またひとつ松ぼくり蹴る秋思かな 大阪 山内 藤彦  
 せがまれて焼諸売を追ひし日も 神戸 金田八江子  
 日当れる方へ方へと浮寝鳥 野々市 辻 文江  
 なつかしき顔を交へて忘年会 浜田 堀本 満子  
 囃子方親子でつとめ里神楽 高知 伊野部哲也  
 リヤカーに神社の落葉あふれけり 千葉 駒井ゆきこ  
 余生こそおもしろきかな日記買ふ 神戸 小柴 智子  
 木守柿峡の夕日を離さざる 下関 貞包 清子  
 口調良き耀師の氣勢息白し 伊賀 山村 勝子  
 初雪を踏みて故郷の音の中 小諸 丸山 ま美  
 身に隠し事なけれども著ぶくれて 高松 宇和川 厚  
 湖晴れて比良に架かれる時雨虹 吹田 河辺さち子  
 極楽へゆく貌ばかり日向ほこ 春日 志鶴 富生  
 神渡千年楠をゆさぶりぬ 尾鷲 若林 柗矢  
 雪冠る山の見えしも暫しの間 鹿児島 田畑 茅花

毛糸編むうちに静まりゆく心 柏 渡辺 彰子  
 放水の雫まだ落ち火事現場 静岡 堀内 智子  
 余生とはこんな時とも日向ほこ 朝来 枚田登志子  
 注がるる人目に耐へて尚も咳 金沢 中村 直美  
 うどん以て風邪薬とす昔あり 生駒 南 純子  
 大漁旗次々もどる浜師走 神戸 三木 雅子  
 日記果つ余白に思ひ残しつつ 太宰府 陶山 禎子  
 山茶花の散り際といふ見頃かな 宮若 菅井久美子  
 茎折れてぶつきらぼうに蓮枯るる 倉敷 中田 鈴江  
 毛糸編む膝にぬくみを加へつつ 八代 山下さと子  
 残るより散り敷く紅葉華やげる 岡崎 富田 征也  
 逢はねばと思ふ人あり日短 熊本 平山紀美子  
 千歳飴抱きて抱かれて大あくび 広島 山根 正巳  
 短日の予定食み出すことばかり 郡上 谷口 恒子  
 提灯を暗く灯して飾売 東京 篠崎 千春



## 編集後記

さしくれし春雨傘を受取し 虚子

「さしくれし」を受けて「受取し」と応じた、この呼吸が一句の眼目である。繰り返される「し」は、過去でなく完了の意味でなければならぬ。「春雨傘」の造語は、女性が手渡してくれた傘を阿吽の呼吸で受け取った動きのある一場面に焦点を当てたものだ。「春雨」は京都独特の繊細なそれであるから、女の手としなやかなその動きを連想させる一瞬の「艶」なる場をつなぐ重要な小道具となった。

●一月の常務理事会・理事会では、新体制に向けて、人事と事務局の更新が主なテーマとなりました。協会の体力に見合った、予算の計画と執行も重要です。昨春秋より事務局に潮見智子さんが着任、業務の引継ぎが行われつつあり、併せて業務の効率化を計画しております。

●今号記載した協会賞の選考委員評は来月号で掲載します。選ばれた作品とその理由を知ること、重要な俳句の学びとなります。稲畑汀子賞の応募もお待ちしております。

●一月末、協会を代表して角川俳句賞の授賞式に出席いたしました。受賞者は、虚子の愛好家で一物仕立てのみの作品集で受賞、複数の選考委員からも今求められているのは、こういう俳句だという声が寄せられました。一般には、作りやすい「取り合わせ」が全盛に見えますが、次の段階に進もうと志

すと、吟行・写生・題詠・一物仕立ては必須となってきます。

●開成高校の指導で知られる佐藤郁良氏もインタビュで、言葉からの発想の段階から、吟行・写生・十句句会へ進んだことを語られています。今協会に求められている役割もここにある、と実感した次第です。

(井上泰至)

### 花鳥諷詠三月号(通巻第四四号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年三月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五一一九一

FAX 〇三三四五五一一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一―一九二